

北畠八穂人生隨筆

すばらしいこと

北畠八穂人生隨筆

すばらしいこと

実業之日本社

北畠八穂人生隨筆

すばらしいこと

昭和四十六年十月二十日 発行

定価六〇〇円

著者 © 北 畠 八 穂

発行者 増 田 義 彦

東京都中央区銀座一の三の九号

発行所 実業之日本社

電話(六六〇) 翌二(代)

郵便番号(〇四) 振替東京 三三六

関西支局 大阪市北区真砂町五三

郵便番号五〇 電話(三三〇) 一五〇六

印刷 東京 研 文 社
製本 共 文 堂

北畠八穂人生隨筆

すばらしいこと 目次

すばらしいこと	5
みごとに暮し	12
田舎の婆さま	19
不思議な才能	27
逆境からつかむ宝の素	49
悲しみは美しく	63
かつこう	68
誠実な娼婦	71

タエのこと	82
悪　人	104
おべんとう	120
幽霊をみた	125
美しくなる術	135
不自由が知らずもの	140
時間とのつきあい	146
一炷のけむり	151
菊漬、ほし菊	158
作るたのしみ	161
とっておきの話	166
むかしばなし	172

夜語り	181
一瞬の冷気	190
二十秒の静視	196
雪に埋めた豆わらじ	200
忘れられない言葉	209
あとがき	214

すばらしいこと

私も、人は、何故^{なぜ}生れてきたのでしょうか。それは、一人ひとりが、自分でなければ決してできない、つまり自分一人だけができるすばらしいことをするために生れてきたのです。

これは私も、ある年とった女の人から知らされたことです。

そのおばあさまは、老^{としよ}ってから、家族を戦争ですっかり失くした方でした。

広い家屋敷を売って、もとの屋敷のすみにたっていたお茶室に住んでいました。

このおばあさまが、昔、使った人に招待されて、伊豆山の温泉へ行っていたときのことです。

たった今、海へ投身自殺をして、助けられた十七歳の少年があるとききました。

おばあさまは、その少年が保護されている警察へ出かけてゆきました。

少年は黒人と日本人の混血児でした。

警察では助けてはみたものの、てんでむくれっぱなしの少年に、手こずっていました。

おばあさまは、少年に会わせて下さいと頼みました。警察でもおばあさまの人柄に、まあ会わせてみようかとなり、会わせました。

おばあさまは、少年に、

「ね、あなた」

と呼びかけました。少年はそっぽをむいて、石でした。それでも、おばあさまは、

「ね、あなた、あなたは、あなたでなければできない、素晴らしいことをするために、生れてきたのをご存じないのですか」

と、静かにゆっくり、くりかえして問いかけました。

すると何度目かに、少年はいきなりくっつかかりました。

「クロンボでもか、親なしっ子でもか」

おばあさまはおだやかに、

「そうです。黒いから、親がないから、できるすばらしいことがあるのです」

すばらしいこと

少年は、フンとあざ笑いました。

「いいかげんな、ウソをほざくなッ」

と、どなりました。

おばあさまは待っていたとばかり、

「じゃ、私といっしょにきてごらんさい。あなたに、すばらしいことができるのを、わからせて上げますから」

と、うけあいました。少年は、

「オイボレのモウロク文句であってみろ」

毒づきながら、ついてきました。警察にいるのはイヤだし、他に行くところがなかったからでしょう。

おばあさまは住居の茶室につれて帰りました。質素ですが、心のこもったもてなしをしたのです。その心づくしに、少年は少しずつカタクナな心をやわらげました。

茶室は湘南のみどりのなかにあって、気もしずまったのでしょう。

おばあさまは少年に畑をたがやすことを頼みました。土の中から、すばらしいことをほり出させたいように、二十日大根の種をまかせました。十日となく芽が出ました。

少年は口笛をふきました。二十日大根の根に赤い玉がつきました。おばあさまはおいしい酔のものにしてたべさせました。少年は、竹を切って笛をつくりました。笛をふいて、自分たちのしみ、おばあさまのしませました。おばあさまは、

「私に笛をきかせて下さるのは、ジョウジ、あなただけよ、すばらしい」

と喜びました。少年は笛が上達しました。

ようやく少年が生きかえりはじめたとみたおばあさまは、定時制高校に頼みこんで、聴講生にやり、四月から入学させました。

高校四年間も、昼はおばあさまとたべる野菜を茶室のまわりにつくり、おばあさまの手内職、皮細工を手伝うアルバイトでした。

高校を出たジョウジは、地下鉄工事場へ働きにゆきながら、夜間大学へゆきました。

大学を卒え、盲人の学校へ勤めました。

手のかかる盲人学校の職員が不足していたときです。

目の見えない生徒たちは、ジョウジ青年の肩から腕から手探りして、

「先生、たのしい体つきですね」
とか、

「こんな体だから、笛が上手にふける息がつづくんですね」

「先生の笛をきくと、私は、いろんなものの形や色がわかるんだ。みえてくるんだ」
そういって、ぐるりにまつわりました。

ジョウジ青年は、おばあさまに、

「おばあさま、ほんとに、私でなければできないすばらしいことができる心地です」
青年は目の見えない生徒たちに、どうしたら役立つかと心をつかいました。

おばあさまはこのジョウジ青年に、

「ね、わかりましたね。あなたが黒くなかったら、親なし子でなかったら、目の見えない人たちのかなしみを、かみわけてわかって上げられなかったでしょう。人のかなしみがよくわかる人がすばらしいことができます」

そして、

「あなたが十七のとき、死にたくなるほど不足していたのは、人の親切でしょう。不足したものは、ない、ないとなげいてみて、そこで創り出すことです。あなたも、私も」

ジョウジ青年は腹のそこらうなずきました。

このジョウジは、黒くなかったら、自殺しかなかったら、このおばあさまと会えたでしょ、

うか。

おばあさまも戦争で家族をそっくり、急になくさなかったら、こんなに心深くなったでしょうか。

その人に、あたえられてきたかなしみを、こうして、親切に変えることができるのです。かなしみで堀った心の深さから、思いやりの愛を湧かせられます。

すばらしいことではありませんか。

おばあさまが言いました。

「手も足も不自由な、目も見えない耳もきこえない人だって、いいえ、そういう人だからこそ、はたの人の魂をハッとさせる光を出せるのです」

と、微笑んで、

「もし、そんな体中が不自由な人がまばたき一つでも、涙のひとしづくでも、生きていることの嬉しさを、つまり、人の愛をみることの嬉しさを表現してごらんなさい。それをみた人は、そのすばらしい感謝の光にハッとたれて、屍になりかけているくたびれた方も、カツを入れられて生きなおりましょう」

もう一つ、花咲くような微笑を重ねて、

「そこに愛がわきます。人に愛をわかせた人はすばらしいことをした人です。どんな生れたての赤ン坊でも、どんな体の不自由な人でも、相手に愛をわかせるすばらしさは、できるのです」

ジョウジ青年は、目の見えない生徒に、きかせようと、休みの日、おばあさまの茶室でみた虹を笛の曲につくりました。

青葉の風、水音、潮ざいも、笛の曲にしました。目の見えない生徒は、虹という詩、水というたを作りました。

いま、五体満足の人は、いっそう、いろいろできるはずです。

自分でなければ決してできないすばらしいことは、むずかしいことばかりではありません。自分のぐるりの人、家族なり、同僚なりに、心からはほえみをおくることだって、自分でなければできないすばらしいおくりものです。

ゆきずりの人にささやかな親切をすることだって、そのとき、自分でなければできないすばらしいことです。

生れて来甲斐のある、時間との、つきあい方をしようと、ねがおうではありませんか。二度とは来ない、今の「時」です。

みごと^いな暮し

ものごとをていねいに、ねんごろに暮す若夫婦があります。

この若夫婦はスラスラと縁を結び、ことごとくの祝福をうけて結婚した二人ではありません。
ん。

ダンナ様の方の家族も、まして奥さんの方の家族も、この結婚には大反対でした。反対するいくつかの条件がそろっていました。

奥さんが体の弱いこと。ダンナ様はボツラクした家の息子で、財産がカケラも無い上に、収入もたいして多くないこと。

ダンナ様よりお嫁さんの方が四つ年上であること、などです。

しかし、二人は、おたがいのデキに、魅かれあっていました。
ある先輩が二人をよんで確かめました。

青年は、

「この人の他にいっしょに住みたいとは思いません」

お嫁さんになる方は、

「この人ならゼツタイ頼れます」

こうして結ばれた夫婦です。

この夫婦は、結婚六年目に、六坪半の家をたてました。二畳の書斎、三畳の茶の間、四畳半の座敷。台所、風呂場、お手洗完備です。敷地は、崖ぶちの十五坪です。

南側の庭に、右へよせて、木の繁みらしく、椎の木かげをつくり、その根元に四季咲きバラのひと一むら。その外はミョウガ、シヨウガ、ナス、キュウリ、シソの葉が庭の風情ふぜいです。

団地暮らしをしていたころも、うまいなァという住み方をした若夫婦でしたが、小さな家の設計もすみにおけない間取りです。

二畳と三畳と四畳半が、ふだんはまことに他に犯かされない独立した室なのですが、その三間をあけ放せば、結構広い十畳近くになるしかけです。

屋根裏がもの置き場になっていて、軒に空気抜きがついています。

この若夫婦は奥さんの体が弱わくて、子供はうめないので承知で結婚しました。

「人と似たことはできないのです。私どもとくべつなことをしたいとねがいました」

南斜面に、ほんの十五坪の土地を買ひ、六坪半の家をいち早くたてました。また、少しでも大きな家をたてられるときがきたら、大切に住んだこの家は、誰かにゆずり渡して、引っこすつもりです。

この若夫婦の暮らしはおもしろいのです。

ダンナ様は学者で、大学の先生です。

奥さんは人形づくりです。

ささやかな暮らしながら、念の入った暮らしです。

ここの家の食事はうまいから、よくよばれてゆきます。奥さんは、

「お食後のくだものや、お菓子をすり上げようとおよびしてるみたい」

と、こっちがありあわせを、かき集めてゆく土産を有効にたのしんでくれます。

この家の朝食、昼食、夕食の一例をあげてみましょうか。どれも気がきいています。

朝は、ていねいにつくられたミソ汁に、おこうこ、ナスのシソ巻きでした。